



防衛研究所

The National Institute for Defense Studies

## 多次元統合防衛力の構築にむけてー 7

ー「世界一流の軍隊」を目指す中国軍ー

NIDS コメンタリー

地域研究部 中国研究室 岩本 広志

第 137 号 2020 年 9 月 8 日

### はじめに

「平成 31 年度以降に係る防衛計画の大綱」（以下、「30 大綱」と記す）は、中国が今世紀中葉までに「世界一流の軍隊」を建設することを目標に、透明性を欠いたまま、軍事力の質・量を広範かつ急速に強化していることを指摘している。

本稿では、中国が目指す「世界一流の軍隊」とはどのようなものなのかを考察するため、中国における軍事訓練に関する報道等を通じて、現場レベルの部隊活動の状況の一端を示す。

### 1 習近平が掲げる「強軍目標」の内容と「世界一流の軍隊」の方向性

中国では 2015 年末から、建国以来最大ともいわれる軍改革の断行が開始された。大規模な組織改編を伴う改革のねらいは、軍に対する共産党の指導の強化や効率的な統合作戦のための基盤整備にあると考えられる<sup>1</sup>。2017 年 10 月に開催された中国共産党第 19 回党大会で習近平総書記は、党の新時代における強軍目標とは、「党の指揮に従い、戦闘に勝利でき、優れた気風をもつ人民軍隊を建設し、人民軍隊を世界一流の軍隊に築き上げることであり」と述べた<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 『中国安全保障レポート 2017』 52 頁。

<sup>2</sup> 括弧内の日訳は『新華網（日本語）』 2017 年 10 月 28 日、[http://jp.xinhuanet.com/2017-10/28/c\\_136711568.htm](http://jp.xinhuanet.com/2017-10/28/c_136711568.htm) から引用

<sup>3</sup> 『求是網』 2018 年 6 月 29 日、[http://www.qstheory.cn/dukan/qs/2018-06/29/c\\_1123054429.htm](http://www.qstheory.cn/dukan/qs/2018-06/29/c_1123054429.htm)

<sup>4</sup> 『日経新聞』 2010 年 7 月 20 日；『RFI』 2012 年 3 月 1 日、

党の理論誌に位置付けられている『求是』では、世界一流の軍隊とは、革命化、現代化、正規化された軍隊であり、潮流をリードする刷新型の軍隊でなければならないとされている<sup>3</sup>。

中国が、軍の構造を大きく変えて作り上げようとしている「世界一流の軍隊」には、党の軍隊であることと同時に、装備や組織機構等が近代的であることが求められるのである。中国ではこれらを両立させるため、各種施策や軍事訓練が積極的に行われている。

### 2 党軍としての性格を維持・強化しつつ進められる軍改革

そもそも中国は国家として、中国共産党による指導を受けることが憲法で規定されており、中国の軍隊、人民解放軍もまた、国軍ではなく党の軍隊である。国が党に優越することは許されず、将来の総参謀長候補とも目されていた章沁生上将是、軍の国家化を主張して処分されたといわれている<sup>4</sup>。

習近平政権下で、党軍としての特徴は強化されている。たとえば 2019 年に行われた建国 70 周年のパレードでもそれは明確に表れた。パレードの当初、ヘリコプター及び儀仗隊が掲げたのは、いずれも党

<https://www.rfi.fr/cn/%E4%B8%AD%E5%9B%B D/20120301-%E4%BC%A0%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E5%86%9B%E6%96%B9%E5%89%AF%E6%80%BB%E5%8F%82%E8%B0%8B%E9%95%BF%E7%A B%A0%E6%B2%81%E7%94%9F%E5%9B%A0%E5%86%9B%E9%98%9F%E5%9B%BD%E5%AE%B6%E5%8C%96%E8%A8%80%E8%AE%BA%E8%A2%AB%E5%81%9C%E8%81%8C>

旗を先頭に、国旗、軍旗の順であった。また、装備品による行進の先頭を「戦旗」梯隊が、解放軍の前身である労農紅軍にゆかりのある赤い旗を林立させて車両行進した。このような例が確認されるのは初めてである。中国は国旗法で、国旗がその他の旗と行進する際、国旗を前にする（15 条）ように定めているが、パレードは党の優位性を強く感じさせるものとなった。

これらのことは、2015 年末から断行された軍改革で、軍の最高司令部機能を解体的に再編し、中央軍事委員会（党の機関であり国家の機関でもあるが実際は一体<sup>5</sup>）の軍隊に対する力を相対的に高めたことが関係しているとみていいだろう。人民解放軍は大きな陸軍の組織とされてきたため、従来「陸軍指導機構」が存在しなかったが<sup>6</sup>、このことについて習近平は 2013 年 11 月、「大陸軍主義を放棄」と発言しており<sup>7</sup>、実際に一連の改革で陸軍は海・空軍などと同格にされ、陸軍指導機構が創設された。改革は「党軍」としての性格を損なわないようにして進められたのである。

### 3 近代軍としての実戦的訓練の充実

#### (1) 見せるための訓練からの脱却

習近平は、2012 年 11 月に党の総書記、2013 年 3 月に国家主席に就任、この頃から既に「全軍は軍事訓練を戦略的な位置に据え、部隊の実戦化レベルを不断に向上させなければならない」と指摘する等、軍の実戦能力向上について主張していた<sup>8</sup>。中国の軍事訓練においては、徹底しきれない現実を残しながらも、実戦的な訓練を追求し実施してきていることが確認されている。その具体例として、以下に 3 つの事例を紹介する。

第 1 は、2014 年に報じられた、成都軍区のある旅団の訓練記事である。当該訓練では、4 つの「初」達成として、以下のことが報じられた<sup>9</sup>。

- ①初めての高地における実装・実弾・実支援の訓練
- ②初めての運動中の戦車に対し実弾射撃で打撃を与える訓練
- ③初めての実装戦場における応急処置・整備の訓練
- ④初めての情報システムを活用した総合的兵站の演練

これらの「初」は、能力の向上が示された一方で、問題点も多かったという。記事によると、無人走行させた戦車に対して戦闘用車両 2 両が射撃したが、命中しても停止せず、5 発目の命中でやっと停止したという。この事例からは以下のような問題点等も指摘されている。

- ・従来では、命中イコール大破の判定だった。
- ・射撃後、敵からの反撃がないのは不自然である。
- ・5 発命中でも大破せず、乗車させていた実験用の羊 2 頭の命に別状はなかった。
- ・整備用に大型車 5 両分の器材等を準備していたが必要な部品が速やかに見つけられず、2 時間の遅延が生じた。

記事では、旅団長が「戦法が実戦に合致しておらず、『発見イコール命中、命中イコール大破』の思考に陥っていたが、今回の件で、未来の作戦においては必ずしもそうではないということが分かった」というコメントをしており、部隊レベルでの認識の甘さがうかがわれる。

第 2 は、党組織による訓練内容への関与に触れた記事である。中国の軍事訓練では、兵員がナイフを口にくわえたまま各個動作を行う光景が多々見られていた。勇猛さ・精強さを誇示するかのような形相で行われていたものであり、その意義が疑問視されていたものである。近年、この「ナイフくわえ」は、見せかけだけの「形式主義」として淘汰されただかに思われていた。しかし 2020 年 3 月、『解放軍報』において、「『ナイフくわえ』が訓練場に復帰」と題された記事で、場面によっては有用にもなり得

<sup>5</sup> 『学習時報』2020 年 2 月 14 日。

<sup>6</sup> 『令和元年版防衛白書』、62 頁。

<sup>7</sup> 杉浦康之「中国人民解放軍の統合作戦体制—習近平政権による指揮・命令システムの再編を中心に

—」『防衛研究所紀要』第 19 巻第 1 号、2016 年 12 月、110 頁。

<sup>8</sup> 『人民日報』2012 年 11 月 18 日。

<sup>9</sup> 『解放軍報』2014 年 10 月 10 日。

るとして「復帰」を果たした。これは、訓練時、「斬首」任務のため崖を上っていた兵員が高所から落下した際、痛みから声を出して敵に暴露してしまい任務に失敗したが、口にナイフをくわえていればそうはならなかったのではないかという、訓練後の AAR での意見がきっかけだったという。結局、当該部隊の党支部は、「ナイフくわえ」の復帰を決定したと報じられている<sup>10</sup>。ナイフをくわえることの適否もさることながら、党組織が訓練に直接関与しているということに特殊性がある。

第 3 は、対抗演習に関する記事である。2014 年、七大軍区から 7 個の旅団が訓練部隊「紅軍」(我)として、それぞれ朱日和基地の対抗部隊「藍軍」(敵)と対抗演習を行ったところ、1 勝 6 敗で訓練部隊の惨敗に終わったという<sup>11</sup>。人民解放軍の演習は、従来は「訓練部隊が攻撃、対抗部隊が防御」、「訓練部隊が勝ち、対抗部隊が負け」で定番化されていたが、これを打破したのが、朱日和訓練基地に所在する対抗部隊であるといわれている<sup>12</sup>。同基地は、内モンゴル自治区に位置し、面積は 1,000 平方キロメートル以上、アジア最大にして最も先進的といわれている訓練基地である<sup>13</sup>。また同基地では、2015 年の対抗演習で確認された、台湾の総統府と同形状の建造物が、2017 年の建軍 90 周年記念の際も、国営テレビの映像に映り込む形で確認されている<sup>14</sup>。訓練の成果と報道の効果の狙いも考慮した場合、対抗演習の「戦績」だけでは、実戦化の進捗の程度は判断が困難ではあるが、以前と比して「実戦化」が強く意識されるようになってきていることは確かであろう。

## (2) 実戦に近づく訓練

軍改革が始まった当初は上記のような見せるた

めの訓練と実戦的な訓練の間で悩ましい事態に陥っている状況が報じられていたが、最近ではその成果を示すかのような、真に実戦的な訓練についても多く報道されている。ここでも 3 つの事例を紹介する。

第 1 は、2020 年 6 月の『解放軍報』第一面に掲載された記事である。ある旅団は長距離機動後、従来であれば一旦結節を設けて次の行動への準備をしていたような場面で、息をつく間も無く、対抗部隊の空軍機から襲撃を受けたという<sup>15</sup>。この記事は、移動間も各指揮系統の間で連携を保持し、次の作戦に移る態勢がとれていること、空地の連携によって陸軍部隊を空軍機が攻撃したことも注目される。

第 2 は、史上最大の海上閱兵に引き続いて空母艦隊が訓練を行ったという事例である。2018 年 4 月、南シナ海において中国の史上最大規模の海上閱兵が行われた。閱兵には、空母「遼寧」を含む艦艇 48 隻、航空機 76 機、人員 1 万人以上が参加、習近平は迷彩服姿で、世界一流の海軍建設を強調した<sup>16</sup>。閱兵が終了するや「遼寧」を含む艦隊は訓練海域へ移動、西太平洋及び東シナ海において、航空部隊や潜水艦部隊との「背中合わせ方式(演習の統制を最小限にして双方が自由な意思で対抗する方式)<sup>17</sup>」の訓練を実施したというのである。

この訓練では、バシー海峡東側、西太平洋海域において、「遼寧」を中心とした戦闘隊形を構成し、警戒ヘリの運用、艦載レーダーによる早期警戒態勢の確立、海空目標の搜索・識別、状況に応じた指揮官の決心等を実施し、東シナ海においては、対空作戦及び対潜作戦等の課目訓練を実施、航空機部隊や潜水艦部隊との「背中合わせ方式」の対抗訓練、潜水艦脅威下の海域の突破等を実施したという。また、

<sup>10</sup> 『解放軍報』2020 年 3 月 26 日。

<sup>11</sup> 『人民日報』2014 年 8 月 3 日。

<sup>12</sup> 『央視新聞客戶端』2017 年 7 月 30 日、  
<http://m.news.cctv.com/2017/07/30/ARTIHX7ktivD8hfIsJmYYlh6170730.shtml>

<sup>13</sup> 同上

<sup>14</sup> 『蘋果即時』2017 年 7 月 30 日、  
<https://tw.appledaily.com/politics/20170730/VC4DBVRCWAPC7K4I6KUM4QEGOY/>

<sup>15</sup> 『解放軍報』2020 年 6 月 26 日。

<sup>16</sup> 『新華網』2018 年 4 月 12 日、  
[http://www.xinhuanet.com/mil/2018-04/12/c\\_129849403.htm](http://www.xinhuanet.com/mil/2018-04/12/c_129849403.htm)

<sup>17</sup> 桐山博文「中露軍事協力の展望——中露合同演習の分析から」『NIDS コメンタリー』57 号(防衛研究所、2017 年 1 月) 3 頁。

艦載機部隊は約 20 機を有し、陸海空の目標に対する打撃や、制空権の奪取のための重要な力を具備するとされている。今回の訓練は、海空域における活動のみならず地上戦力との連携も行っており、訓練のレベルについて、戦術的なものから戦術・戦役的なものへの向上が指摘されている<sup>18</sup>。

第 3 は、中国がサイバーに関する対抗訓練を通じて、その攻撃と防御の能力を向上させていることを示す記事である。ある旅団では、従来は「重点＝通信の確保」というレベルだった訓練が、隊力の柔軟な運用等で訓練環境を整備、効果的に実施することにより、現在では複雑なサイバー環境下における妨害・破壊等を含む、実戦的なものを行い得るようになったとされている。訓練後には旅団長、大隊長、中隊長から末端の操作手に至るまで一堂に参加する AAR が行われ、問題点として「サイバー攻撃の手段がワンパターン」ということも挙げられたという<sup>19</sup>。

「30 大綱」でも中国の急速なサイバー能力の向上が指摘されているが、サイバー部隊として知られる「61398」部隊以外でも、中国の部隊は多様なサイバー攻撃を念頭に置きつつ、各種能力向上に積極的に取り組んでいることが示されている。

### おわりに

中国は「世界一流の軍隊」の構築に向け、スピード感をもって積極的に各種の訓練等を行っているが、透明性の欠如や習慣・思考の差異も相まって、如何なるアプローチをとっているのか、そしてその先にあるのは如何なる姿なのか、正確に把握することは困難を伴う。しかし、軍事訓練時の現場の状況を観察することで、中国が軍事的な行動を行う場合の様相を含め、的確に看取できる可能性がある。このため、平素の中国の軍事訓練の動向等を確認していくことが重要であると考えられる。

## プロフィール

profile

地域研究部

中国研究室

所員 3 等陸佐 岩本 広志

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29171）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

<sup>18</sup> 『新華網』2018年5月24日、  
[http://www.xinhuanet.com/mil/2018-05/24/c\\_129879827.htm](http://www.xinhuanet.com/mil/2018-05/24/c_129879827.htm)

<sup>19</sup> 『解放軍報』2020年7月7日。